

歩兵第十六聯隊とジャバ戡定作戦

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

わが国の日米交渉は行きづまりの状態を呈し、両国の風雲は急を告げ、米・英膺懲（鉄槌を下すこと）の声が国内津々浦々にみなぎっていた。

昭和十六年十二月八日未明、第二十五軍がマレー半島に上陸、時同じくして機動部隊はハワイ真珠湾を奇襲、大東亜戦争が勃発し「対米英宣戦布告」の詔書が下った。

支那事変勃発以来、既に四年有余、戦友達は国民歓呼の裡に出征し、今や支那大陸にて破竹の勢いを以って奮闘中であつた。この二ヶ月前の十月、聯隊に動員令(臨時編成令)が下達された。

聯隊将兵は、昭和十五年十月末、満州派遣より帰還し、その後上陸作戦の訓練を積み重ね意気衝天の有様であつた。

昭和十六年十二月三日、広安聯隊長以下将兵は、懐かしの新発田をあとに千葉県習志野廠舎に移駐し、更に猛訓練を続けた。

十二月八日対米・英両国に宣戦が布告され将兵の士気はあがり、第十六軍（今村均中将）編組内に入り、ジャバ（ジャワ島）攻略戦に従事すべきことを知った。

この時の出征は、裏門から夜間密かに新発田駅に向かった。沿道は勿論、駅に於いても「歓呼の声に送られて」とか、「臉に浮かぶ旗の波」という光景はなく、汽車の窓は全て閉じられ寂しい門出であつた。

この頃は国家の重大機密が国外に漏れ、防諜の必要性があつた。

当時新発田町長であつた原町長によると「師走のせまる頃、南方戦線へ出征の広安部隊の時は、部隊よりマル秘の連絡で一人町長が、県民、町民を代表して深夜吹雪の駅頭でひそかにお見送りいたしました」と語っている。

聯隊は第一次躍進地点を台湾と定められ、十二月二十七日先発隊が、主力は昭和十七年一月中旬より遂次習志野を發し、汽車輸送により乗船地宇品に向かった。

一月十七日、宇品港出港、台湾高雄を経て仏印（当時フランス領のインドシナ半島）カムラン湾に集結のため向かった。

二月七日、カムラン湾停泊中、次の聯隊命令が下達され爾後の攻撃を準備した。

「聯隊命令要旨」

- 一、 聯隊は、主力をもって「メラク」南側に奇襲上陸し、随所に敵を撃破し一挙に「ボイデンゾルグ」付近に進出せんとす。
- 二、 第二大隊は右第一線攻撃部隊となり「メラク」南部海岸に奇襲上陸し「ランカスピトン」に向かい突進すべし。
- 三、 第三大隊は左第一線部隊となり「メラク」北部海岸に奇襲上陸し「ランカスピトン」に向かい突進すべし。
- 四、 爾後の諸隊は第二戦攻撃部隊となり第一線攻撃部隊に追及、先ず「ランカスピトン」に突進すべし。

三月一日、聯隊は午前一時二十分上陸開始、二時に奇襲上陸に成功したが、師団主力方面に於いては砲声をきくと共に閃光の上がるのを見た。

一方師団主力の予備隊として、歩十六聯隊第一大隊はバンタム湾に進入した。右舷四、五百メートルに陸影が見え、寂として物音一つせず、敵は上陸を察知していないようであった。甲板に出て空を仰げば、星は輝き、輸送船は相接近し徐行している。

突然遙か前方に、砲声二発！我が護衛艦の威嚇射撃であろうかと気にも留めずに上陸準備中、突如我が上空に飛行機の爆音があり、一発の照明弾が明るく輝いた。彼我不明の裡に、突如として、猛烈な敵の砲撃を受けた。

「中隊長殿、軍の輸送船が大分やられたようです。源大隊長殿の船も傾いています」と小野軍曹が報告した。（第一中隊）

上陸用舟艇の往来する中に、輸送船の名を呼ぶ声、指揮する声が入り乱れて上陸を敢行、その声は砲声と共に暗夜にひびいた。

遙か沖合では彼我の海戦が盛んで、火を吹きながら沈みゆく敵艦が夜目にも明らかに見え、激戦を思わせた。上陸よりは敵の反撃もなく、予定の如く進展しているようであった。

「人員のみ至急上陸をおわり、資材は後送するように」との上陸命令で、既定計画を変更し、各船上陸を開始した。

海岸は珊瑚礁岩で、将兵は波打ち際五、六十メートルで小発動艇より海中に飛び込み、水深腹部まで達する中を上陸した。

付近には海水でずぶ濡れになった兵の姿や、上陸地を眼前にして、この地を踏むこともなく英霊となって横たわる者もあって、合掌して冥福を祈った。この正面では、師団長も源大隊長乗船の輸送船も共に沈められた。

一方、聯隊主力はメラク～チレゴン道を攻撃前進しチレゴンに進出、引き続きセランに向け前進した。若干の敵の抵抗を排し、セランからは一部自動車の配属を受け、第二大隊を乗車させ、ランカスピトンに向い前進せしめた。

敵はチャンテン河東方約千五百メートル、ボジョンネロスに陣地を占領していた。

第三大隊は第九中隊を第一線、第十一中隊を第二線攻撃部隊として攻撃を開始した。

聯隊長は第三大隊と行動を共にした。敵は遂次我が右翼に兵力を増加し、聯隊又第二大隊を右に増加し、四日午後九時、敵第一線を突破し第三大隊は直ちに追撃に移った。

敵はチバタック附近に兵力を集結、レウリアン及びボジョンネロス附近の敵は装甲車を有する約一個大隊で、ボイデンゾルグに向かい後退した。五日午前、これを蹴散らし、敵の遺棄した装甲車に機関銃を装しこれを利用した。

聯隊は、三月八日午後二時、最終目標の「バンドン」に向け、第三大隊をして、あらゆる自動車及び自転車を利用し猛進せしめた。

九日午前二時過ぎ、第三大隊を以ってチマヒに侵入、ここは敵主力の兵営地帯で、全面降伏の意を表した敵は兵営の前に集結し殆んど敵意を表さず、大隊は直ちに武装解除に着手、軍都バンドンを完全に占領した。

敵蘭印軍（米英と共同作戦をとった、米軍・英軍・オーストラリア軍の一部）の主力は原住民（インドネシア人）で、その抵抗意識は激しいものではなかった。

上陸以来十日間で、距離約二百五十キロに及ぶ電撃作戦であった。

この戦闘において、第三大隊には戦死者なく、第二大隊には、小野口大隊長以下数名の戦死傷者をだした。

三月十四日、バンドンに於いて師団主催の合同慰霊祭が行われた。

三月十九日、イデンゾルグに於いて、聯隊慰霊祭を実施し、爾後、警備、軍政に任ずると共に次期作戦の為、教育訓練に専念した。

（新発田聯隊史より）